

サーチライト With Pastor Jon 黙示録 第1章 パート2

このメッセージはアップルゲート クリスチャン フェローシップの、ジョン・コーソン牧師が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録するのを感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りょくさんの為にも、お祈りください。

「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」

ヘブル4:7

メッセージ by ジョン・コーソン牧師 アップルゲート クリスチャン フェローシップ

<http://joncourson.com/>

7590 Highway 238 Jacksonville, OR 97530

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by Rin

さて今回は1章8節の続きから。

神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。

「わたしはアルファであり、オメガである。」(黙示録 1:8)

みなさん、新約聖書はギリシャ語で書かれましたね。

アルファとはギリシャ語の「A」、オメガは最後、英語で言う「Z」にあたります。

実は、ここでとても興味深いことがあるのです。

ヨハネは「わたしはアルファであり」を「アルファ」と言葉で書きました。

ところが、「オメガである。」は「オメガ」という言葉を用いず、ギリシャ文字の「Ω」としたのです。

アルファは言葉で書き、オメガは文字にした。

これは、神学者によって意見の分かれるところですが、私はこう思います。

主は、はじめ（アルファ）であるが、終わり（オメガ）はない。主には終わりがなく、オメガは永遠にこない。

私たちは天国で主を知り、主について発見し、驚きワクワクしながら、何百万年、何億年、何千億年…という永遠の時を彼と共に過ごします。

終わることのない終わり。主には終わりがなく、私たちには永遠の時。

主はアルファであり、そして、終わりのない終わり、主はΩなのです。

私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。(黙示録 1:9)

私は主の日に御霊に感じ、(黙示録 1:10)

ここでヨハネは自分のことを、「あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者」と言いました。

この書を読むにあたって、みなさんに覚えておいてほしい事、いつも忘れてはならない事は、ヨハネは牧師であり、牧師としてこれを書いているという事です。

彼は2章と3章に出てくる教会の牧師でした。およそ100歳。

当時、彼が牧していた人たちは、激しい迫害の中にいたのです。

彼らは、恐ろしいほど痛めつけられ、抹殺され、拷問、迫害、差別されていて、しかも、ヨハネ自身は孤島に島流しされていた。

その中でヨハネは、「私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者」だと言ったのです。

「私は最も聖なる使徒、ヨハネだ。」とは言いませんでした。

そうではなく、「私はあなたがたの兄弟で、あなたがたと同じ苦しみにあずかっている者である。」それでこそ、牧師というものです。

しかし、ヨハネは、牧師、聖書学者というだけではありません。

この事を理解していないと、黙示録を正しく把握することはできません。

それは、ヨハネは詩人だということです。

彼は聖霊の導きの下、見たことを言葉で描写しました。

感情や状況も巧みな描写によって、見事にまとめました。

ただの無機質な神学ではなく、物語を伝えたのです。

詩人の彼は、困難を耐える人々の感情を引き出しました。

詩人として、言葉を通して人々に伝えたのです。

「これからやって来る方が、獣を叩き潰すさまをよく見るのだ！」

「後に来られる方が、どういうお方なのかをよく見なさい！」

この書を読み進めていくと、詩のリズムが伝わってきます。

牧師、神学者、そして詩人であるヨハネは、後に来られる主について、書物の中だけの空虚な神学ではなく、現実のものとして伝えようと思いました。

彼は、その希望が、困難の中にある信者の心の中で燃え続けるように、その真実が、彼らのイマジネーションの中で湧きあがるようにと願ったのです。

そのヨハネが「**主の日に御霊に感じた**」と言いました。これはどういう意味でしょう。

日曜日の可能性もあるし、或いは、幻の中で、主の日、主が来られる終わりの時を見たのかもしれない。

それをヨハネは誰に伝えていますか。

その声はこう言った。「あなたの見ることを巻き物にしるして、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤに送りなさい」(黙示録 1:11)

「そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。」(黙示録 1:12)

「それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。」(黙示録 1:13)

「私は、アルファであり、Ωである方を見た。」「はじめであり、終わりである方を見たんだ。」とヨハネは、友人、信者、家族など彼の大切な人たちに伝えました。

ところで、どうしてイエスはご自身を指して「人の子」と言ったのでしょうか。

イエスは、あなたや私に向かって、「わたしもあなたたちの仲間だよ。」と伝えているのです。

「わたしは人の子だ。」と。

同時に、この言葉は、既に与えられていた重大な預言を含んでいます。

私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。(ダニエル書 7:13)

「人の子のような方が天の雲に乗って来る」何か気付きましたか。

この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。(ダニエル書 7:14)

ずっと学んでいる人ならわかりますね。「主は雲に乗って来られる」

「振り向くと七つの金の燭台が見えた。」

この金の燭台、金のろうそく立ては“メノラー”とって、出エジプト記 25 章に記述されています。

また、純金の燭台を作る。その燭台は槌で打って作らなければならない。それには、台座と支柱と、がくと節と花卉がなければならない。(出エジプト記 25:31)

六つの枝をそのわきから、すなわち燭台の三つの枝を一方のわきから、燭台の他の三つの枝を他のわきから出す。(出エジプト記 25:32)

メノラーを見たことがありますか。

一つの台に 7 本のろうそくが立てられるようになっているのですが、ここで、出エジプト記 25 章の型に注目して下さい。

六つの枝。一方から三つ、他方から三つ。そして、中心に支柱の木。

つまり、燭台の枝が中心の木からそれぞれ 3 本ずつ両側に出ている。

これは、ヨハネの福音書 15 章でイエスが言われたことですね。

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。(ヨハネ 15:5)

ようやく、私にもわかってきたのです。

イエスは「わたしは世の光だ。」と言いましたが、同時に「あなたがたも世の光となりなさい。」と語りました。

主がブドウの木で、私たちは主の両側にいる枝。

主が光だから、私たちも光となるのです。

出エジプト記 25 章で説明された燭台は純金でできています。この金は溶かして型に流し込まれた金ではなくて、ひとかたまりの打たれた金、槌で打ち叩かれて引き伸ばされた金です。聖書では、純金は“神格”を表します。

イエスも打ち叩かれました。これが、燭台（メノラー）とイエスの関連性です。

更に、人の子が私たちのために打たれたことによって、私たちの罪が贖われました。

主が私たちと共におられ、私たちも主と共にいる。だから、私たちもイエスと共にメノラーに連なるのです。燭台（メノラー）、興味深いですね。

主は七つの燭台の真ん中におられます。七つの燭台は、これから学ぶ七つの教会のことです。これら七つの教会はそれぞれ領域を示しており、時系列的には教会史を表しています。

“人の子” イエスがヨハネの前に現れた時、彼はその美を、旧約聖書の描写を用いて描きました。

それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、(黙示録 1:13)

これは、旧約聖書では祭司を意味します。確かにイエスは祭司、大祭司なのです！

しかも、その衣は足までたれて全身を包んでいます。

みなさん、キリストの体とは誰のことですか。みなさんと私。

私たちが主の体で、義の衣を着ているのです。

更に続きます。足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、(黙示録 1:13)

金の帯が胸に絞められている。これは珍しいことで驚きます。

旧約聖書時代、祭司は普通、腰の辺りに帯を締めていました。

でも、ここでは胸。どういうことなのでしょう。

イエスは迷ってしまっているこの世を見て、ゲッセマネの園で泣かれました。

この世のためだけではなく、

ああ、エルサレム、エルサレム。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。

(マタイ 23:37)

と言って、国のためにも涙を流されました。主は人類を思って泣き、国のために泣き、個人のためにも涙された。ラザロの墓での話を知っていますね。

イエスは涙を流された。(ヨハネ 11:35)

私は思います。イエスがラザロの墓の前で涙を流されたのは、永遠の中にいるラザロを、このすきんだ世に呼び戻さなければならなかったからだ。

この時、世は、「やったー！ラザロが生き返った！」「すごい！主を賛美しよう！」と手を叩いて喜びました。

しかし、イエスは涙を流された。

人間は、「奇跡だ！すごい！栄光あれ！」と言い、主は「悲しいことだ。」と思われる。

誰かが天に召されたと聞けば、私たちは「まあ…何てこと…。」

しかし、御使いの間では、「おめでとう！やっと世から抜け出せた。」「これであなたも自由だ！」「あなたは主と共にいる。やっと本来の生を生きることができる！」

私たちは全く逆のことを行っているのです。全く逆。

なぜかと言うと、私たちは、ぼんやりと鏡に映るものを見ていて、はっきりとわからないか

らです。

私たちが喜び歓喜することが、時に主を悲しませることであり、私たちが嘆き悲しむことを、主は「いや、栄光だ！」と言われるのです。

通常、帯というのは、何かを固定し続けるために用いるものです。

今、主は、腰ではなく胸に金の帯を締めておられる。

それは、主の心にあなたを縛るため、くくり付けておくためなのです。

胸に金の帯。つまり、主の心は金色で、王座に着いておられる。全ては主の計画通り。

主はもう涙を流されることはないのです。

主が戻って来られる時、私はもうすぐだと思いますが、何が起こるでしょう。

私たちは直ちに天に引き上げられます。

ユダヤ人は、婚礼の儀式を 7 日間執り行いますが、私たちは天国で、主と 7 年間のハネムーンを過ごすのです。

ヨハネ 2 章のカナの婚礼の記事を見てみましょう。

それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、(ヨハネ 2:1)

二日が過ぎて三日目に婚礼の宴が行われ、イエスと弟子たちも招かれました。

その所でイエスは、水をぶどう酒に変えたのです。ぶどう酒は“喜び”の象徴です。

ワクワクと心躍る喜びだけで、醒めた感情はない。

ただ、言葉に言い表せない栄光に満ちた喜びがあるだけです。

つまり私は、三日目に天の婚礼が始まると思います。

一日は千年のようであり、千年は一日のようです。(第 2 ペテロ 3:8)

イエスがこの地に来てから、もう二日が、2000 年の時が過ぎました。

既に三日目に入っています。

三日目に婚礼の儀。私はヨハネの福音書でこれを読んだ時びっくりしました。

そのヨハネが、黙示録を書いたのと同じヨハネが、こうも書いています。

サマリヤ人がイエスの所に来て、自分たちの所に滞在するように懇願した時、イエスは二日間そこに滞在しました。(ヨハネ 4:40)

サマリヤ人が象徴するものは“世”です。

二日間、イエスはサマリヤ人と、あなたがたと共に過ごし、この世に留まって手を差し伸べました。二日間 - - 2000 年間。

そして、三日目に婚礼の儀。

私たち、イエスの花嫁は花婿と共にいて、ぶどう酒 - - 永遠の喜びに満たされるのです。

その日は栄光に満ちた、幸せな一日となるでしょう。嬉しいですね。

足までたれた衣で感情も完全に包まれて、もう、涙もない。

あるのは、黄金の心のみ。

主は全てをご存知です。

その上で、イエスはあなたを愛し、花嫁に選んで下さったのです。

つづく

私を引き寄せてください。

私たちはあなたのあとから急いでまいります。王は私を奥の間に連れて行かれました。

私たちはあなたによって楽しみ喜び、あなたの愛をぶどう酒にまさってほめたたえ、

真心からあなたを愛しています。(雅歌 1:4)